

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト

最終成果論文（2020年度）

“Holy Head”再考: 『ガウェイン卿と緑の騎士』にみる聖ウィニフレッド伝の表象

——Robert of Shrewsbury と Osbern Bokenham から——

経済学部 3年 学籍番号：21615656

氏名：中川健司

（指導教員：不破有理先生）

目次

1. 序論.....	1
2. ガウェイン詩人	5
3. 14世紀までの伝承の流布状況	7
3.1. 口承時代からの信仰の拡大	7
3.2. 王侯貴族との関わり	9
4. 聖ウィニフレッド伝承	11
4.1. 伝承の概要.....	11
4.2. 2つの奇跡.....	12
4.2.1. 斬首後の復活	12
4.2.2. 癒やしの泉の湧出.....	13
4.3. 写本.....	14
4.3.1. Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114.....	14
4.3.2. London, BL Cotton MS Claudius A.v	15
4.3.3. London, BL Lansdowne MS 436.....	15
4.3.4. Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS	16
4.3.5. 4写本に含まれる伝承内容の相違点	16
5. 『ガウェイン卿と緑の騎士』中のモチーフ	19
5.1. 内容概略	19
5.2. ガウェイン卿の旅路	21

5.2.1. 具体的な地名	23
5.3. 泉	27
5.4. 信仰に殉ずる生き様	28
5.5. 斬首後の復活	29
5.5.1. 転がる頭	30
5.5.2. 首の傷跡	31
5.6. 帯と外套	34
6. 結論.....	37
参考資料一覧.....	39

1. 序論

中世英文学の白眉『ガウェイン卿と緑の騎士』(*Sir Gawain and the Green Knight*、以下 *SGGK*) の中に以下のような描写がある (太字強調は筆者による。以下同様)。

Til þat he neƷed ful neghe into **þe Norþe Walez**.
Alle þe iles of **Anglesay** on lyft half he haldez,
And farez ouer þe fordez by þe forlondez,
Ouer at **þe Holy Hede**, til he hade eft bonk
In þe wyldrenesse of **Wyrale**; wonde þer bot lyte
Pat auþer God oþer gome wyth goud hert louied. (ll. 697-702)¹

(He wanders near to **the north of Wales**
with the Isles of **Anglesey** off to the left.
He keeps to the coast, fording each course,
crossing at **Holy Head** and coming ashore
in the wilds of the **Wirral**, whose wayward people
both God and good men have quite given up on.)²

これは、主人公である騎士ガウェイン卿がキャメロット (Camlyot) を出立し、北の方角へ馬を進める場面であり、作中において旅中の具体的な地名が唯一登場する箇所でもある。つまり、ガウェイン卿が辿った道程を復元し、作者が旅の軌跡に込めた象徴をより克明に読み解く上で非常に重要な描写であるといえる。

¹ Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, Eds. *Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd ed. Rev. by Norman Davis. Oxford Clarendon P, 1967, p.20. 以降、『ガウェイン卿と緑の騎士』の中英語校訂版はこれより引用する。

² Armitage, Simon. *Sir Gawain and the Green Knight*. W. W. Norton & Company, 2007, pp. 67, 69. 以降、『ガウェイン卿と緑の騎士』の現代英語訳はこれより引用する。

さて、ここで注目したいのは700行の“*pe Holy Hede*”という地名である。現在の地名で考えると、アングルシー島(Anglesey)の西北端に位置する港町を指し示すところであろうが、これは、ガウェイン卿がアングルシー島を左手に見ながら北進していることから考えるとありえない。となれば、アングルシー島対岸からウィラル(Wyrale)までの地域のどこかを意味していることが推察可能であるが、それは一体どこであろうか。“*pe Holy Hede*”はSGGKのこの箇所にはしか登場しない地名であり、これまでもこの謎の地名、ひいてはガウェイン卿の旅路の詳細に関して様々な議論が成されてきた。

SGGKを含む現存唯一の写本 London, BL Cotton MS Nero A.x が最初に校訂され出版されたのは1839年のことである³。R. W. チャンバース(R. W. Chambers)に拠れば、ガウェイン卿はウェールズの北岸をグレート・オーム岬(the Great Orme's Head)、バギスト・バンク(the Bagillt Bank)を經由して通過したのであり、“*pe Holy Hede*”はその間に存在するホーリーウェル(Holywell)を指し示すという⁴。これに対し、J. R. R. トールキン(J. R. R. Tolkien)とE. V. ゴードン(E. V. Gordon)はチェスター(Chester)沿いを流れるディー川(the Dee)のチェスターから河口までの何処かであると唱えた。彼らの校訂版を改訂したノーマン・デイヴィス(Norman Davis)も同様の立場を採った⁵。更に、R. W. V. エリオット(R. W. V. Elliot)はチェスターのおよそ8キロメートル南にあるポールトン(Poulton)の水源(fountain-head)を指すとした⁶。他、J. McN. ドジソン(J. McN. Dodgson)は*The Life of St Werburge of Chester*に記録が残るチェスター城の城守ウィリアム(Wyllyam)がディー川で行った伝説的渡河とガウェイン卿の

³ Madden, Frederic. *Syr Gawayne; a collection of ancient romance-poems, by Scottish and English authors, relating to that celebrated Knight of the Round Table; with an introduction, notes, and a glossary by Sir F. Madden.* Bannatyne Club, 1839.

⁴ Chambers, R. W. "Sir Gawayne and the Green Knight, II. 697-702." *The Modern Language Review*, vol. 2, no. 2, 1907, p. 167.

⁵ Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, Eds. *Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd ed. Rev. by Norman Davis. Oxford Clarendon P, 1967, p.97.

⁶ Elliot, R. W. V. *The Gawain Country*. University of Leeds, 1984, p. 66.

旅との関連を指摘し、トールキンらの説を補強した⁷(Fig. 1)。これらの学説に対し、チャンバースの立場を継承したのが I. ゴランツ (I. Gollancz)⁸、J. A. バロウ (J. A. Burrow)⁹、J. S. ライアン (J. S. Ryan) である。中でもライアンは聖ウィニフレッドの伝承と *SGGK* との共通点を並べ、「“Holy Head”が聖ウィニフレッドを参照していないと見做すのは不可能である」とまで述べている¹⁰。

このように、“*pe Holy Hede*”が意味する場所を巡る議論は、ディー川の河口部に位置するどこかであるとする立場と、聖ウィニフレッドの聖地ホーリーウェルを指し示すとする立場に大別される。本論では後者の説を *SGGK* が誕生した14世紀における聖ウィニフレッド伝承の伝播・信仰状況を確認し、ガウェイン詩人の^{イマジネール}想像界を再構成することによって、検証していく。

なお、本論で取り扱う地域・地点に関しては、以下の地図で位置関係を把握していただきたい (Fig. 2)。

⁷ Dodgson, J. McN. "Sir Gawain's arrival in Wirral." *Early English and Norse Studies presented to Huger Smith in honour of his sixtieth birthday*. ed. Arthur Brown and Peter Foote, Methuen, 1963, pp. 19-25.

⁸ Gollancz, Israel. *Sir Gawain and the Green Knight: Re-edited from MS. Cotton Nero, A. x., in the British Museum, by Sir Israel Gollancz, Litt. D., F.B.A. With Introduction Essays by Mabel Day, D.Lit. and Mary S. Serjeantson, M.A., D.Phil.* Oxford University Press, 1940, p. 107.

⁹ Burrow, J. A. *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight*. Routledge and Kegan Paul, 1965, pp. 190-194.

¹⁰ Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia." *Parergon*, no. 4, 1986, p. 58.



Fig. 1 北ウェールズ周辺の地図

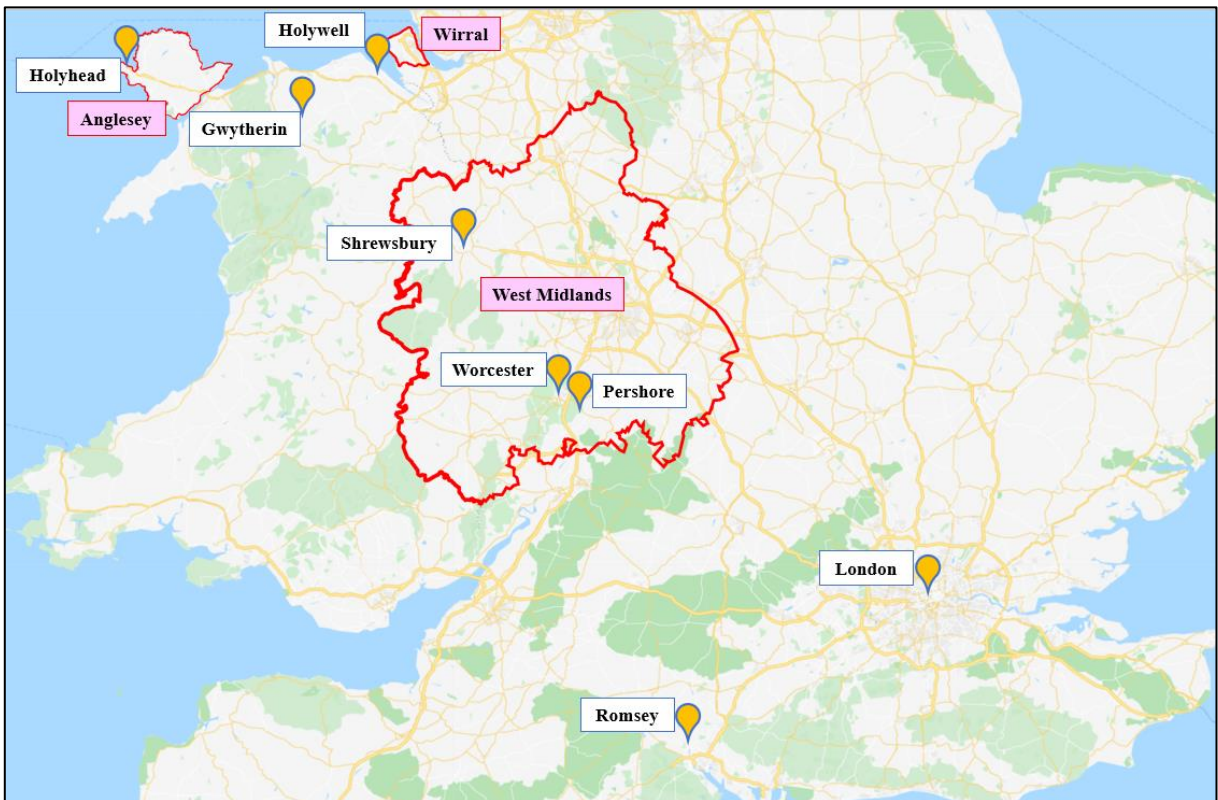


Fig. 2 北ウェールズからイングランド南部までの地図

2. ガウェイン詩人

SGGK と聖ウィニフレッド伝承の関連を考察する上で、まずは *SGGK* を著した人物について考えなければなるまい。しかし現在のところ、作者は特定されるに至っておらず、彼のプロフィールを知るためには残された作品から推察する他に道はない。ゆえに彼を呼称する際は、作品名から「ガウェイン詩人」(Gawain-Poet) あるいは「パール詩人」(Pearl-Poet) が通常用いられている。本論では *SGGK* を取り扱うことから「ガウェイン詩人」を採用する。

ガウェイン詩人が生きたのは、作品の制作年代から 14 世紀と推測される。ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) やジョン・ガワー (John Gower) といったイングランドの著述家と同時代人であるが、彼らがロンドンを中心に活動し、(標準的な英語である) 南部の英語で作品を著述したのに対し、ガウェイン詩人はノース・ウェスト・ミッドランド方言 (the North-West Midland dialect) で詩作を行った。

同じ方言や頭韻の韻律が用いられていることから、*SGGK* と同じく London, BL Cotton MS Nero A.x に含まれる *Pearl*、*Patience*、*Cleanness* (あるいは *Purity*) と、London, British Library Harley MS 2550 にのみ含まれる *St. Erkenwald* がガウェイン詩人の作品として挙げられる。*Pearl* は娘を失った男が見る夢の内容を描く幻視譚である。*Patience* と *Cleanness* は聖書を下敷きにした訓戒譚であり、*St. Erkenwald* は 7 世紀のロンドン司教、聖エルケンワルドがキリスト教以前のブリトン人の魂に、彼の涙を以てこれを洗礼とし、救済を与えるという筋書きの聖人伝である¹¹。これらを見ればガウェイン詩人が宗教的作品を残した

¹¹ Putter, Ad. and Stokes, Myra. *The Works of the Gawain Poet: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. Penguin Classics, 2014, p. x.

ことは明らかであろうし、彼が別な聖人の伝承に興味を示したであろうことはライアンも指摘する通り容易に想像がつく¹²。

また、これらの作品の表現や語彙から、ガウェイン詩人はラテン語聖書のみならず、フランスの騎士道ロマンスにも通じていたとされる。更に、城の装飾や晩餐、狩猟、金細工の精巧な描写が成されている点から、宮廷かそれに値する環境に身を置いた人物であったと推定されている。しかし、地方の郷紳^{ジェントリ}に仕えたのかあるいは王家に仕えたのかといった具体的な所属は明らかになっていない。とはいえ、教育を受け、一定以上の社会的地位を有した人物であったことは間違いない¹³。

以上のことから、本論の時間空間世界は「14世紀」の「ノース・ウェスト・ミッドランズ」を軸に据えることとする。

¹² Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia." *Parergon*, no. 4, 1986, p. 59.

¹³ Brewer, Derek. "Introduction." *A Companion to The Gawain-Poet*. ed. by Derek Brewer and Jonathan Gibson, published by D. S. Brewer, 1997, pp. 1-2; Putter, Ad. and Stokes, Myra. *The Works of the Gawain Poet: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. Penguin Classics, 2014, p. xiii-xiv.

3. 14世紀までの伝承の流布状況

SGGK と聖ウィニフレッド伝承の関係を考察するために、ガウェイン詩人の生きた14世紀当時の伝承の流布状況および信仰の在り様を確認していく。

3.1. 口承時代からの信仰の拡大

初期ウィニフレッド信仰の二大拠点として挙げられるのが北ウェールズのホーリーウェルとグイセリン(Gwytherin)である(Fig. 2)。前者は彼女の伝承の要である癒しの泉が存在する町である。後者はホーリーウェルより南西40キロメートルほどにある町で、ホーリーウェルを離れ、女子修道院の院長として活動した聖ウィニフレッドが没した地である。聖ウィニフレッドの伝承は7世紀にまで遡るが、成文化以前の信仰を直接観察することは難しく、後述する写本の内容に依拠するところが大きい。ホーリーウェルは現在でも多くの巡礼者を集める信仰の地だが、今日の教会は15世紀に再建されたものであり、当時の情景を知ることは叶わない。とはいえ、信仰の存在を示す物的証拠が全く無いわけではない。特にグイセリンは信仰の中心地として在り続けたホーリーウェルから距離があったことからか、彼女の棺(the Arch Gwenfrewy)を始めとする多くの遺物が長期間保存されていた¹⁴。

1138年にシュルーズベリー司教ロバート(Robert of Shrewsbury)によってグイセリンから聖ウィニフレッドの遺骸の一部がシュルーズベリー・アビー(Shrewsbury Abbey)へ移管され、その翌年である1139年にロバートによって現存最古の成文化された伝承が作成される。この聖遺物の強奪ともいえる移管

¹⁴ Hallmark, Sally. "Gwenfrewy the guiding star of Gwytherin: From maiden and martyr to abbess and saint - The cult of Gwenfrewy at Gwythein." PhD diss., University of Wales Trinity Saint David, 2015, pp. 91-92. 現在はホーリーウェルの St. Winifred's Well Museum にその一部が所蔵されている。

および聖人伝の作成は、ウェールズの宗教的シンボルをイングランドに移動させることで、宗教的にウェールズをイングランド化すると共に、聖ウィニフレッドの威信をイングランドに移さんとする目論見であり、逆説的にウェールズにおける聖ウィニフレッドの影響力の大きさを証明する事件でもある¹⁵。その後、シュルーズベリーからホーリーウェルへの巡礼路が整備されるなど、北ウェールズの一地方の聖人伝であった聖ウィニフレッド伝承はイングランド周縁のシュルーズベリーを介し、イングランドに拡大していくこととなる。

14世紀末の1398年にはカンタベリー大司教ロジャー・ウォルデン(Roger Walden, the archbishop of Canterbury)によって聖ウィニフレッドの祝祭をカンタベリー管区内で執り行うことが命じられ、実際に1416年、後継のヘンリー・チチェリー(Henry Chichele)によって、同じくウェールズの聖人である聖デイヴィッド(St. David)、聖チャド(St. Chad)と共に聖ウィニフレッドの祝日を恒久的に祝うことが決定された¹⁶。政治的区分としてウェールズが正式にイングランド王国の一部となるのは16世紀を待たねばならないが、教会行政区分においては、既にカンタベリー大司教管区の下に、ホーリーウェルが属するセント・アサフ(St. Asaph)を始め、セント・デイヴィッツ(St. David's)、スランダフ(Llandaff)、バンガー(Bangor)のウェールズの4つの司教区が属する形となっており、イングランドにおいて聖ウィニフレッドの伝承が受け入れられる宗教的地盤が構築されていたという背景がある¹⁷。

¹⁵ Golding, Brian. “Piety, Politics, and Plunder Across the Anglo-Welsh Frontier: Acquiring the Relics of Winifred and Beuno.” *Monasteries on the Borders of Medieval Europe: Conflict and Cultural Interaction*, ed. by Emilia Jamrozak and Karen Stöber, Brepols Publishers, 2014, pp. 19-48.

¹⁶ Scully, Robert E., S. J. “St. Winefride's Well: The Significance and Survival of a Welsh Catholic Shrine from the Early Middle English Ages to the Present Day.” *Saints and Their Cults in the Atlantic World*, ed. Margaret Cormack, the University of South Carolina Press, 2007, p. 208.

¹⁷ 山本信太郎「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼——中世から近世の聖ウィニフリッドの泉——」、『神奈川大学人文学研究叢書 43「自然・人間・神々」——時代と地域の交差する場』、上原雅文 編、お茶の水書房、2019年、p. 162.

3.2. 王侯貴族との関わり

1138年にシュルーズベリーというウェールズ、イングランドの交流が盛んな文化都市へ聖遺物が移管されたことで、彼女の伝承はより広範な地域に伝わることとなった。それに伴いホーリーウェルへの巡礼者も増加し、果てにはイングランドの王侯貴族も巡礼を行っている。このことから彼女の伝承に対する信仰の繁栄ぶりを覗き知ることができる。

1115年、第二代チェスター伯リチャード (Richard, 2nd Earl of Chester) によって巡礼が行われたことが16世紀に書かれた *The Life of St Werburge of Chester* に記録されている。

The seconde erle of Chestre after the conquest
Was erle Richard / son to Hug. Lupus :
Whiche Richarde entended all thing to the best ;
To visite saynt Winifride in hert desirous,
Vpon his iourney went / myn auctour sayth thus,
Deuoutly to holy-well in pilgrimage,
For his great merite and gostly aduantage. (ll. 1416-1422)¹⁸

(The seconde Earl of Chester after the conquest
was Earl Richard, son of Hugh Lupus:
which Richard intended all things to the best,
to visit Saint Winifred in desirous heart,
upon his journey went, [as] my author says thus,
devoutly to Holywell in pilgrimage,
for his great merit and spiritual advantage.)

また、最初にイングランド王が行ったホーリーウェルへの巡礼として、多くの学術書、さらには泉の公式 Web ページまでもが、1189年のリチャード1世の

¹⁸ Bradshaw, Henry. *The Life of Saint Werburge of Chester: Englisht A.D. 1513, Printed by Pyson A.D. 1521, and now Re-edited by Carl Horstmann*. Early English Text Society, 1887, p.179. 現代英語訳は私訳。

巡礼を紹介しているが¹⁹、これは18世紀ウェールズの著述家トマス・ペナント(Thomas Pennant)が第二代チェスター伯リチャードの巡礼について言及した箇所を、リチャード1世によるものと誤読した結果の謬説であり、1398年のリチャード2世による巡礼が王族による初の巡礼である²⁰。これはカンタベリー大司教ウォルデンが聖ウィニフレッドの祝祭に関して勅命を出した年と同年代あり、14世紀における聖ウィニフレッド信仰の高まりを示す証左といえよう。15世紀に入ってもヘンリー4世やその息子ヘンリー5世、更にはエドワード4世、リチャード3世が巡礼を行っており、ホーリーウェルは王侯貴族の耳目を集める一大聖地であり続けた²¹。このように、14世紀の聖ウィニフレッド信仰は、次の世紀までその昂ぶりが続くほどの熱量を持っていたのである。

¹⁹ Scully, Robert E., S. J. "St. Winefride's Well: The Significance and Survival of a Welsh Catholic Shrine from the Early Middle English Ages to the Present Day." *Saints and Their Cults in the Atlantic World*, ed. Margaret Cormack, the University of South Carolina Press, 2007, pp. 207; "Royal Pilgrims & Visitors to St Winefride's Well." *St Winefride's Well Shrine*, <https://www.stwinefrideswell.org.uk/royal-pilgrims.html>.

²⁰ Hurlock, Kathryn. *Medieval Pilgrimage, c. 1100-1500*. Palgrave Macmillan, 2018, pp. 186, 201; Webb, Diana. *Pilgrimage in Medieval England*. Hambledon and London, 2000, p. 134.

²¹ Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012, pp. 225-226; Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia." *Parergon*, no. 4, 1986, p. 54.

4. 聖ウィニフレッド伝承

4.1. 伝承の概要

聖ウィニフレッド²²は7世紀に生きたとされる北ウェールズを代表する女性の聖人である。彼女の伝承を伝える写本や印刷本は数多く存在するが、本論ではガウェイン詩人が知り得た伝承を考察する観点から、後述する4つの写本の内容を特に参照する。以下で概略するのは、その内の一つ **Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114**に見られる伝承の英訳を筆者が抄訳したものである²³。

ウィニフレッドはテガイング (**Tegeingl**) の3つの村々を治める領主テイス (**Theuith**)²⁴の娘として生まれた後、聖バイノ (**Beuno**) の薫陶を受け、神に純潔を捧ぐことを誓っていた。両親が聖バイノの修道院に礼拝へ出かけたある日曜日、体調の悪いウィニフレッドが自宅で一人過ごしていたところに、豪族の息子であるカラドック (**Caradoc**) が父を訪ねてくる。ウィニフレッドの美しい顔に見惚れたカラドックは彼女に求婚を申し込んだ。ウィニフレッドは申し出を受け入れる振りをし、高貴なカラドックに相応しい服装に着替える為、と理由を付け寝室の中に入ると、彼に悟られないように別の出口から聖バイノの修道院へ逃亡を図った。しかし、逃げるウィニフレッドを見つけ、騙されたことに気付いたカラドックは、彼女を追いかけ捕まえるとそのまま剣で首を刎ねてしまうのであった。斬り落とされたウィニフレッドの頭は教会の中へ転がって

²² 聖ウィニフレッドの綴りは現在でも一つに定まっていない。彼女の名前の綴りとして **Winifred**、**Winefride**、**Winefridae**、**Wenefreda**、**Wenefred** の他にウェールズ名としてグウェンフレウイ (**Gwenfrewy**、**Gwenfrewi**) が確認できたが、本論では先行研究を参考に英語名 **Winifred** を採用し、音写としてウィニフレッドを用いる。

²³ **Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. Two Medieval Lives of Saint Winefride. Peregrina Publishing Co, 2000, pp. 23-40.**

²⁴ ウェールズ名はタフィド (**Tyfid**)。

行き、礼拝中の信徒、そして聖バイノにこの惨劇を伝える。聖バイノがカラドックに呪いをかけると、カラドックは大地の裂け目に吞まれていった。あるいは、彼の体が蠟燭のように溶けて消えてしまったと話す者もいた。更に聖バイノはウィニフレッドの頭を横たえた体にすげ、着ていた外套を被せると、民衆と共に神に祈りを捧げた。すると、頭と胴体が繋がりウィニフレッドは息を吹き返した。首元に一条の跡が残るばかりで、他に傷は一つも無い。彼女の頭が落ち、彼女の血が流れ込んだ大地からは水が溢れ出し、泉を成した。彼女の血液に染まった石が沈み、乳香薫る苔が生える泉は、今日に至るまで様々な病を癒す奇跡の泉として伝わっている。

4.2. 2つの奇跡

前述の聖人伝の中で登場する奇跡は2つ存在する。それは「斬首後の復活」と「癒やしの泉の湧出」である。これらの奇跡について以下に簡単にまとめる。

4.2.1. 斬首後の復活

斬られた頭が再び繋がるあるいは、首を斬られても死なず自由に動き回るといふ筋書きはウェールズ、イングランドのみならず世界中の神話・民話・伝承に見られる²⁵。ウェスト・ミッドランズに住むガウェイン詩人に馴染みある聖人に絞っても、聖ウィニフレッド以外にも多数存在することがメアリ＝アン・スタウク(Mary-Ann Stouck)によって指摘されている²⁶。しかし、彼女が挙げた6人の聖人、聖ユスティニアン(St. Justinian)、聖ネクタン(St. Nectan)、聖フレムンド(St. Fremund)、聖カドック(St. Cadog)、聖グウィニア(St. Gwinear)は

²⁵ 広範な地域の伝承については Kittredge, George Lyman. *A Study of Gawain and the Green Knight*. Harvard University Press, 1916, pp. 147-194. が詳しい。

²⁶ Stouck, M.-A. “Of Talking Heads and Other Marvels: Hagiography and Lay Piety in Sir Gawain and the Green Knight”. *Florilegium*, vol. 17, Jan. 2000, pp. 59 -72, <https://journals.lib.unb.ca/index.php/flor/article/view/15362>.

いずれも北ウェールズに所縁のある聖人では無い点には注意したい。斬首されても生き続けるイメージは聖ウィニフレッドに特有でなくとも、北ウェールズという地域から連想される「斬首→復活」のイメージは聖ウィニフレッドに帰着する。

4.2.2. 癒やしの泉の湧出

同様に、癒しの泉の伝承も聖ウィニフレッドに特有のものではない。ウェールズ、イングランドに留まらず、大陸ヨーロッパにも類似の伝承は数多く存在する。それらは元々その土地土地の大地の神や水の神に対する土着信仰、すなわちキリスト教から見れば異教の信仰に由来するものであり、泉や湖は病気治癒と結びついてきた。これらの信仰はキリスト教が布教された後も衰えることがなく、反対に洗礼と結びつくなどして、信仰の維持に利用された²⁷。中でもブリテン島には 7000 を越える聖なる泉が存在し、特にアイルランドやウェールズに集中して分布している。そのような聖なる泉の中には特定の聖人と結びつかないものがおよそ 370 存在し、反対に複数の泉が同一の聖人と関係づけられるものも存在する。そうした状況の中で、フランシス・ジョーンズ(Francis Jones)は一つの泉と一つの教会と関係付けられた聖ウィニフレッドは中世において最も著名な聖人であったのであろうと推測している²⁸。

²⁷ Pryce, Huw. “Pastoral Care in Early Medieval Wales.” *Pastoral Care Before the Parish*, ed. by John Blair and Richard Sharpe, Leicester University Press, 1922, p. 41; 池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』、名古屋大学出版会、2020年、pp. 252-262

²⁸ Jones, Francis. *The Holy Wells of Wales*. University of Wales Press, 1992, p. 49.

4.3. 写本

ガウェイン詩人が知り得た聖ウィニフレッド伝承の詳細を把握するべく、以下の写本を取り扱う。14世紀以前の写本は、制作時期順に 1) Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114 (以下 Laud MS)、2) London, BL Cotton MS Claudius A. v (以下 Cotton MS Claudius)、3) London, BL Lansdowne MS 436 (以下 Lansdowne MS) の3つが挙げられる。本論ではこれらに加え、伝承内容の繋がりを考察する観点から、15世紀に制作された写本である 4) Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS (以下 Abbotsford MS) を取り扱う。

4.3.1. Oxford, Bodleian Laud Misc. MS 114

パーショア・アビー (Pershore Abbey) に所蔵されていた、13人の聖人伝を含む写本である (Fig. 2)。12世紀に制作されたと考えられている。記述言語はラテン語。ロバート・オブ・シュルーズベリーの *Vita sancte Wenefrede* (*Life of the Blessed Winifred*) (fols. 140r-158r) 及び聖遺物の移管を説明した *Translatio sancte Wenefrede* (*Translation of Saint Winifred*) (fols. 158r-163v) を含む (以下、この2篇を *Vita et Translatio S. Wenefredae* と総称する)²⁹。但し、この写本そのものがロバートによるオリジナルの写本では無いという見方が一般的である³⁰。制作年代は最も古い、その内容は後述する Lansdowne MS や Abbotsford MS で参考にされている他、15世紀にはウィリアム・キャクストンによって活版印刷で出版された聖ウィニフレッド伝 (*Lyf of the holy and blessid vyrgyn saynt Wenefryde*, STC25853) の底本となるなど、後代に強い影響力を及ぼした。

²⁹ “MS. Laud Misc. 114.” *Medieval Manuscripts in Oxford Libraries*, Bodleian Libraries, https://medieval.bodleian.ox.ac.uk/catalog/manuscript_6923.

³⁰ Gregory, James Ryan. “A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512.” PhD diss., University of Georgia, 2012. pp.380-383.

4.3.2. London, BL Cotton MS Claudius A.v

『ピーターバラ年代記』(*Peterborough Chronicle*)やウィリアム・オブ・マームズベリー(William of Malmesbury)の*Gesta Pontificum Anglorum*(*Deeds of the Bishops of the English*)といった歴史書の他に、聖人伝のコレクションが含まれる。その中の*Vita Sancte Wenefrede Virginis*(*Life of the Blessed Virgin Winifred*)(fols. 138r-141r)と*Miracula Sancte Wenefrede Virginis*(*Miracles of the Blessed Virgin Winifred*)(fols. 141r-145v)は12世紀末から13世紀初頭の間制作された。記述言語はラテン語、作者は不明である。カンブリア(Cumbria)のホーム・カルトラム・アビー(Holme Cultram Abbey)に所蔵されていたが、製作地はウースター(Worcester)であると考えられており、ウェスト・ミッドランズ南部へのウィニフレッド信仰の伝播を覗うことができる³¹(Fig. 2)。

4.3.3. London, BL Lansdowne MS 436

43人の英国の聖人伝がおおよそ年代順に書かれている写本である。その35番目として*Incipit de sancta Wenefreda virgine et martire*(*Here Begins the Life of St. Gwenfrewy, Virgin and Martyr*)(fols. 107r-109r)が登場する。14世紀前半にラテン語で記述された。その内容はLaud MSとCotton MS Claudiusのウィニフレッド伝の内容を綜合したものとなっている。当初、ハンプシャー(Hampshire)はロムジー・アビー(Romsey Abbey)の修道女らによって所蔵されており、その内容は聖ウィニフレッドの女子修道者の模範像としての役割を強調する形になっている³²。この写本の存在によって、14世紀前半にはイングランド南部に

³¹ “Cotton MS Claudius A V.” *Digitised Manuscripts*, British Library, http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Cotton_MS_Claudius_A_V; Gregory, James Ryan. “A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512.” PhD diss., University of Georgia, 2012. p.186.

³² “Detailed record for Lansdowne 436.” *Catalogue of Illuminated Manuscripts*, British Library, <https://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=5273&CollID=15&NStart=436>; Gregory, James Ryan. “The Life of St. Winifred: The Vita S. Wenefrede from BL Lansdowne MS 436.” *Medieval Feminist Forum: Subsidia Series*, Vol. 4, the University of Iowa Libraries, 2016, pp. 1-4, 50-53.

において聖ウィニフレッドの伝承が受容されていたことが分かる (Fig. 2)。

4.3.4. Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS

2005年、ウォルター・スコット (Walter Scott) が晩年を過ごしたアボッツフォード邸の図書室から発見された写本である。制作時期は1450-75年の間と考えられており、記述言語は中英語である。逸失したと思われていたオズバーン・ボクナム (Osbern Bokenham) による『黄金伝説』 (*Legenda Aurea*) の英訳が含まれていたことがサイモン・ホロビン (Simon Horobin) によって指摘された。この中にはボクナムが独自に加えた数名の聖人伝が含まれており、*The Lyf of Seynt Wenefrede* (fols. 214v-218v) はその中の一篇である³³。ボクナムによる聖ウィニフレッド伝は現在のところこの写本にのみ見られる。その内容はロバート・オブ・シュルーズベリーの *Vita et Translatio S. Wenefredae* の他にラノルフ・ヒグデン (Ranulph Higden) の *Polychronicon*、そしてボクナム自身がホーリーウェルへの巡礼を通して現地の住民から聞いた伝承をもとに書かれたと考えられている³⁴。

4.3.5. 4写本に含まれる伝承内容の相違点

写本によって伝承の細部にバリエーションが存在する。以下にそれらの差異を簡潔に表にして示す (Fig. 3)。4写本に共通するモチーフに関しても、5節で取り扱う内容に関しては載せた。それぞれの写本の内容は Laud MS はロナルド・ピピン (Ronald Pepin) による英訳を³⁵、Cotton MS Claudius はヒュー・ファ

³³ 写本の電子スキャン画像は Advocates Library のサイトで閲覧可能である (“*Legenda Aurea.*”, *The Advocates Library*, The Faculty of Advocates, <http://www.advocates.org.uk/faculty-of-advocates/the-advocates-library/significant-finds-at-abbotsford/legenda-aurea>.)。

³⁴ Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012. pp.282-295; Horobin, Simon. "The Angle of Oblivioun: A Lost Medieval Manuscript Discovered in Walter Scott's Collection." *Times Literary Supplement*, 11 Nov 2005: 12-13.

³⁵ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000.

イス（Hugh Feiss）による英訳を³⁶、Lansdowne MS はジェイムズ・グレゴリー（James Gregory）による英訳を参考に行っている³⁷。また、Abbotsford MS には未だ出版された校訂版が存在しておらず、本論ではグレゴリーによる校訂を参照した³⁸。

特に着目したいのは斜字体で強調した二つのモチーフ、「転がる首」と「ウィニフレッドに被せられたバイノの外套」である。この二つは 12 世紀の Laud MS には現れるが、13-14 世紀の Cotton MS Claudius と Lansdowne MS には現れない。これだけでは、これらのモチーフが伝承の過程で喪失した可能性が残り、14 世紀のガウェイン詩人が知り得た聖ウィニフレッド伝承で現れるかも定かではない。しかし、15 世紀にボクナムが著した伝承ではこれらは両方とも残存している。Abbotsford MS の中にはボクナムが実際にホーリーウェルを来訪し住民から伝承を聞いた旨が書き記されており、またロバート・オブ・シュルーズベリーの残した伝承をボクナムも知ることができたということも踏まえれば、ガウェイン詩人が同様にロバート・オブ・シュルーズベリーの聖ウィニフレッド伝を知り得たといっても良いだろう。伝承拡散の要であったシュルーズベリーが、ガウェイン詩人が生きたと考えられるノース・ウェスト・ミッドランズに位置することも当然忘れてはならない。

以上のことから、次の 5 節では SGGK と Laud MS 並びに Abottsford MS の聖ウィニフレッド伝との比較検討を進めていく³⁹。

pp. 23-40.

³⁶ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. pp. 95-101.

³⁷ Gregory, James Ryan. "The Life of St. Winifred: The Vita S. Wenefrede from BL Lansdowne MS 436." *Medieval Feminist Forum: Subsidia Series*, Vol. 4, the University of Iowa Libraries, 2016, pp. 30-49.

³⁸ Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012. pp.411-421.

³⁹ 本論で取り扱わなかったウェールズ語の写本との内容比較は Henken, Elissa R. *Traditions of the Welsh Saints*, published by D. S. Brewer, 1987, pp. 141-151, 348-350. が詳しい。

比較点	Edinburgh, Advocates Library, Abbotsford MS (Abbotsford MS)	Oxford, Bodleian Laud MS 114 (Laud MS)	London, BL Cotton MS Claudius A. v (Cotton MS Claudius)	London, BL Lansdowne MS 436 (Lansdowne MS)
タイトル	<i>The Lyf of Seynt Wenefrede</i>	<i>Vita sancte Wenefrede Translatio sancte Wenefrede (Vita et Translatio S. Wenefredae)</i>	<i>Vita Sancte Wenefrede Virginitis Miracula Sancte Wenefrede Virginitis</i>	<i>Incipit de sancta Wenefreda virgine et martire</i>
制作年代	15世紀	12世紀	13世紀	14世紀
製作地	不明	Pershore	Worcester	Romsey
使用言語	中英語	ラテン語	ラテン語	ラテン語
作者	Osbern Bokenham	Robert of Shrewsbury	不詳	不詳
ペイノがやって来る経緯	明記なし	布教のため新しく教会を開く	セリム (Sekym) の息子たちに追放され、放浪していたところ通り着いた	明記なし
ウィニフレッドが家に一人で居た理由	明記なし	体調が悪く、家で休んでいたため	修道院へ荷物を運ぶために、両親より遅れて修道院へ向かう予定であったため	明記なし
カラドツグが訪問する理由	ウィニフレッドの父に会うため	ウィニフレッドの父に会うため	狼に脅き、水を求めて	狼に脅き、水を求めて
ウィニフレッドがカラドツグの求婚を断り逃走する過程	父が船るまで家でくつろいでもっていたカラドツグから求婚される。髪や服装を整えるためという理由で寝室へ入り、そのまま教会へ逃走。	父が船るまで家でくつろいでもっていたカラドツグから求婚される。髪や服装を整えるためという理由で寝室へ入り、そのまま教会へ逃走。	一度は求婚を断るが、これに激昂したカラドツグを見て、申し出を受け入れる振りをし、相応しい服装に着替えるためという理由で寝室へ入る。その後、教会へ逃走。	一度は求婚を断るが、これに激昂したカラドツグを見て、申し出を受け入れる振りをし、相応しい服装に着替えるためという理由で家に入る。その後、教会へ逃走。
斬られた首の行方	教会の中へ転がっていく	教会の中へ転がっていく	地面に落ちたまま	地面に落ちたまま
カラドツグの死に様 (ペイノの嘆いの結果)	大地の裂け目に吞み込まれる	大地の裂け目に吞み込まれる、あるいは溶けて消える	狼獾のように溶けてしまう	狼獾のように溶けてしまう
復活に至る折り	体にペイノの外套を被せる ペイノと教会にいた群衆全員で祈る	体にペイノの外套を被せる ペイノと教会にいた群衆全員で祈る	ペイノのみが祈る	ペイノのみが祈る
首の傷跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡	首の周りに一条の跡
泉の湧出	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水	頭が落ちた場所より湧水
注記				Laud MSとCotton MS Claudiusの統合

Fig. 3 4 写本の内容比較

5. 『ガウェイン卿と緑の騎士』中のモチーフ

5.1. 内容概略

『ガウェイン卿と緑の騎士』は、4つのフィット(fytte)と呼ばれるまとまりから構成される全 2531 行のロマンスである。現存する写本は大英図書館所蔵の Cotton MS Nero A.x のみである。以下にその内容の概略を記す。なお、本節で取り上げるモチーフに関する箇所については太字で強調を施した。

第1フィット。クリスマスの祝宴中のキャメロットに突如として全身緑色の装いをした緑の騎士が来訪する。彼はアーサー王の武勲を聞きつけ、クリスマス・ゲーム(余興)として「首斬り試合」の挑戦を申し込む。これは、円卓の騎士の誰かが緑の騎士の首に斧で一撃を入れ、代わりとして一年後に緑の騎士からの斧の一撃を受ける、という内容であった。この挑戦をガウェイン卿が受け、斧で緑の騎士の首を切り落とす。頭は地面に落ち、皆に足蹴にされ**転がった**。しかし、緑の騎士は絶命することがないばかりか、落ちた頭を自ら拾いあげた。そして、「一年後に『緑の礼拝堂』に来い。」とガウェインに言い残し、去って行っていくのであった。

第2フィット。翌年の万聖節(11月1日)の翌日早朝、ガウェイン卿は緑の騎士との約束を果たすべくキャメロットを出立する。「緑の礼拝堂」を探し、ガウェイン卿は当てもないまま北上、遂には北ウェールズにまでたどり着く。竜や野獣、人食い鬼との戦いを経て、彼は森の中に居を構える城館を発見する。城主は親切にもガウェイン卿を歓待し、また幸運なことに彼は件の礼拝堂の場所も知っているという。城主は、礼拝堂はすぐ近場であるからとし、ガウェイン卿に約束の期限までの三日間自分の城に滞在することを勧めてくる。ガウェ

イン卿はこの申し出を喜んで受け、また城主との遊びとして「城主が狩りで得た獲物はすべてガウェイン卿へ、ガウェイン卿が滞在中に得たものはすべて城主へ渡す」という交換のゲームを行うこととなった。

第3フィット。城主が狩りに出ている間、部屋で休んでいるガウェイン卿の寝床に城主の奥方が彼を誘惑しにやってくる。ガウェイン卿は奥方の尊厳を傷つけぬよう丁寧に断るが、一度の口づけだけ許してしまう。城主が狩りから帰ってくると、約上に従い城主は狩りの獲物である鹿をガウェイン卿へ渡し、ガウェイン卿は口づけを城主に行ったのであった。二日目は猪と二度の口づけの交換、三日目は狐と三度の口づけの交換といったように、二日目、三日目も同じ構造で話が進行する。但し、三日目だけはガウェイン卿は約束を違えてしまう。それは奥方から贈られた「それを締めている限り誰からも倒されないという霊験あらたかな**護身の腰帯**」を城主に渡さなかった、というものである。

第4フィット。緑の騎士との約束の日当日、ついにガウェイン卿は「緑の礼拝堂」に辿り着く。礼拝堂は人工的な建造物ではなく、**細川**が水泡立てて脇を流れる塚 (*lawe: mound*) であった。そしてガウェイン卿は川の側で緑の騎士と「首斬り試合」の続きを行うこととなる。すなわち、緑の騎士によってガウェイン卿の首は切り落とされるのである。しかし、緑の騎士は計三回斧を振り下ろすが、最初の一回はガウェイン卿が恐怖ゆえに怯んだことで中断、二回目は寸止め、そして最後の一撃は首に軽い**切り傷**を付けるにとどまった。ここで、緑の騎士の正体が明らかになる。彼はガウェイン卿を歓待した城主が魔法によって姿を変えた人物であった。彼は護身の腰帯を我が身惜しさに城主に渡さなかったガウェイン卿を咎めるべく、斧を振り下ろしたのだ。ガウェイン卿は生き残ったことに安堵すると同時に自身の不徳を恥じ、これを生涯忘れぬように緑の腰帯を身につけるようになったのであった。ガウェイン卿は無事キャメロットに帰城し、物語は幕を閉じる。

5.2. ガウェイン卿の旅路

ガウェイン卿が作品世界内で辿った旅路は、本論冒頭でも引用した 679-701 行の描写から復元することが可能である。具体的な地名が克明に描写されるこの部分は、ロマンスの作品世界と実際の現実世界とをリンクさせる箇所であり、ガウェイン詩人及び当時の読者の頭の中でガウェイン卿の旅路を想像させる要の箇所ともいえよう。彼の旅路の詳細についてはこれまでに多くの議論が積み重ねられてきた⁴⁰。更に、ガウェイン卿が辿り着く森中の城館や緑の礼拝堂に関しても、現実の地理と照応させてその正体を明らかにする試みがなされている⁴¹。また、*SGGK* と同時期の 14 世紀に制作されたブリテン島の地図ゴフ・マップ (Gough Map) には、ウェールズ西岸および北岸を通る交通路が記されており (Fig. 4, 5)、ここからもガウェイン詩人が想定していたガウェイン卿の旅程を確認することができる。さすれば、ガウェイン卿がウェールズ北岸を東進していく道中に聖ウィニフレッドの聖地ホーリーウェルが位置することは明らかである。

⁴⁰ 本稿序論を参照。

⁴¹ Elliot, R. W. V. “Landscape and Geography.” *A Companion to The Gawain-Poet*. ed. by Derek Brewer and Jonathan Gibson, published by D. S. Brewer, 1997, pp. 105-117.



Fig. 4 ゴフ・マップ⁴²



Fig. 5 拡大図(右に90度回転。黄線が交通路、右中央の建造物がチェスターを示す。)

⁴² “Digital Map.” *LINGUITIC GEOGRAPHIES: The Gough Map of Great Britain*, King’s College London, <http://www.goughmap.org/map/>. 向かって左手が北、上が東を向いている。

5.2.1. 具体的な地名

更に、ガウェイン詩人と彼の読者たちの^{イマジネール}想像界を考えた時、すなわち彼らが作中の言葉から何を想起していたかを考えると、北ウェールズという土地の神秘性が明らかになる。ここで着目するのは、“*þe Holy Hede*”の前後に登場する698行のアングルシー(Anglesay)と701行のウィラル(Wyrale)である。

アングルシーという地名は驚異と深く結びついている。9世紀頃の作とされる伝ネンニウスの『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*)にはアングルシー島に関する驚異が紹介されている。

第一の驚異は海のない海岸である。

第二の驚異はそこには一年に三度回転する山がある。

第三の驚異はそこにある浅瀬である。海水が氾濫すると、その浅瀬は氾濫し、海水が退くと、その浅瀬は縮小する。

第四の驚異は夜中にキ(シ)ティイン峡谷を歩き回る石で、これはメナイと呼ばれる海の真ん中にあるケリスの渦巻の中に一度投擲されると、その翌日に上述の峡谷の岸の上に確かに発見されたのである。⁴³

このように、アングルシーには驚異のイメージが付帯しており、アングルシー島を左手に見ながら進むガウェイン卿の姿を想像した際にも、同様に驚異のイメージが想起される。また、ウィラルは、ガウェイン詩人が「神に対しても人に対しても慈しみの心を持って愛する人はほとんどいない」(*wonde þer bot lyte þat auþer God oþer gome wyth goud hert louied. / wayward people both God and good men have quite given up on., ll. 701-702*) というように、キリスト教の神の愛が失われた荒野として表現される。ここでは、キリスト教の教義は息を潜め、代わりに異教の雰囲気醸し出されていく。総じて、北ウェールズという土地は当時を生きるガウェイン詩人にとって驚異と異教のイメージを連想させるに足る

⁴³ 瀬谷幸男訳、伝ネンニウス『中世ラテン年代記 ブリトン人の歴史』、論創社、2019年、pp. 70-71.

地域であったといえる。聖ウィニフレッドの伝承に登場する「泉の湧出」のモチーフが元々異教の信仰のうちにあったという事実もここで思い出しておきたい。ガウェイン卿の北進と共に、異教に端を発する聖ウィニフレッドの伝承のイメージが、聴衆の間で強く想起されたであろう。

さて、“**pe Holy Hede**”がアングルシー島のホーリーヘッドではなく、聖ウィニフレッドの聖地ホーリーウェルを意味していると仮定するならば、この二つの名前がいつから用いられていたのか、その変遷を確認しておく必要がある。前段階として、“**pe Holy Hede**”が写本の段階でどのように記述されているのかを確認する。画像の赤下線部(Fig. 6)が示すように、校訂版では大文字で記されている **Holy** と **Head** の頭文字は写本では小文字となっており、より正確に複写するならば、“**pe holy hede**”となる。

表(Fig. 7)を見ると、ホーリーウェルは1093年にはすでに **Haliwel** の形で表記され、13世紀末まで継続的に現在の名前と近い綴りで記録され続けていたことが分かる。ガウェイン詩人が生きた14世紀の記録ではウェールズ名のトレフィノン(**Treffynon**)しか見られないが、1699年以降 **Holywell** の表記が再び現れることから考えても、ホーリーウェルの呼び名が失われていたとは考え辛い。一方、14世紀以前のホーリーヘッドは専らウェールズ名のカエル・ガビ(**Caer Gybi**)に準ずる名前で綴られているが、1315年には **Haliheved**、1322年には **Holiheved** の記録が残る。よって、ガウェイン詩人が使用した“**pe holy hede**”がホーリーヘッドを意味していなかった、と完全に否定することは出来ない。しかし、ガウェイン詩人がアングルシー島のホーリーヘッドを認知していた場合でも、698行のアングルシーと有機的な繋がりを指摘することができる。すなわち、驚異宿るアングルシーからの連想で“**pe holy hede**”が登場した可能性を論じることもできよう。とはいえ、二地点を同時に記録している1291年の *Taxatio Ecclesiatica Angliae et Walliae* を見る限り、13世紀時点でホーリーヘッ

ドとホーリーウェルが混同され得る名前として認識されていたようには思えず、後述するモチーフも併せて考えれば、ガウェイン詩人の“*þe holy hede*”はホーリーウェルとのより強い結びつきを持っているように思われる。

最後に、以下に続くモチーフとの接続点として、ホーリーウェルの泉から流れ出でた水流について述べる。これは伝承の後半にて、海岸沿いへ居を移した聖バイノへ聖ウィニフレッドが贈り物を送る輸送路として機能することが描写されており、ロバート・オブ・シュルーズベリーの聖ウィニフレッド伝を知る者の意識には強く残ったと考えられる。

... God will deign to bestow on me a suitable place to stay **on the seashore**. ... what you have placed in the spring will be carried to the door of my little lodging, carried over the winding **currents of waters** ...⁴⁴

この水流の存在をガウェイン詩人が意識していたとすれば、ガウェイン卿が「一つ一つ浅瀬を横切りながら海岸沿いを進んでいく」(*farez ouer þe fordez by þe forlondez / keeps to the coast, fording each course*, l. 699) 中で「*þe Holy Hede* を越えて (ウィラルの) 陸へ到着する」(*Ouer at þe Holy Hede, til he hade eft bonk / crossing at Holy Head and coming ashore*) のは至極自然な繋がりを保った進行であるように思われる。

⁴⁴ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. pp. 43-44.

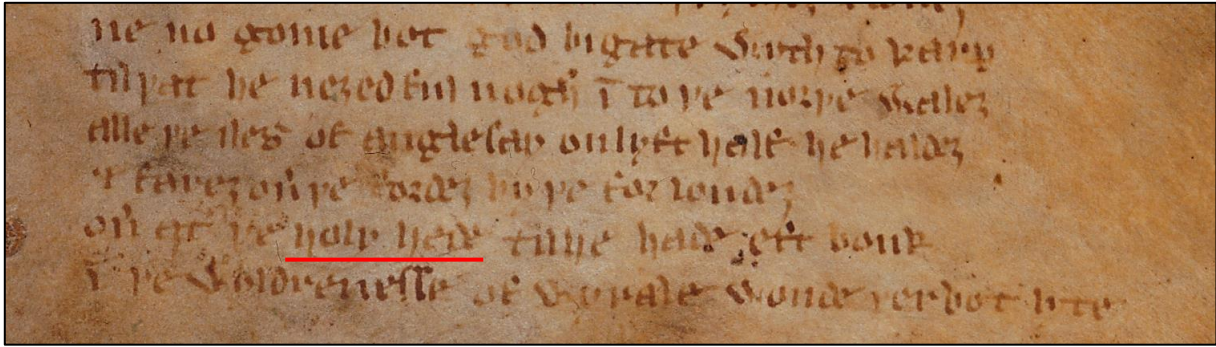


Fig. 7 Cotton MS Nero A.x, f. 104r, ll. 696-701.⁴⁵

When recorded	Recorded name (Holyhead / Caergybi)	Recorded name (Holywell / Treffynnon)	Source
1093		Haliwel	<i>Thomas</i>
1225 (1316)	Karkeby		<i>Dictionary of the Place-Names of Wales</i> (以下DPNW)
1254	Keyr'	Haliwell'	<i>Valuation of Norwich</i>
1284		Halywelle	<i>Littere Wallie</i>
1291	Castro Kyby	Haliwa	<i>Taxatio Ecclesiastica Angliæ et Walliæ</i>
1291 x 1293		Helywell	<i>The National Archives</i>
1310	Castelkyby		<i>DPNW</i>
1315	Haliheved		<i>DPNW</i>
1322	Holiheved		<i>DPNW</i>
1323	Chastel Keby		<i>DPNW</i>
c. 1350		Kastell Treffynnon	<i>National Library of Wales</i>
1352	Caerkeby		<i>DPNW</i>
1352	Caerkeby		<i>RECORD OF CERNARVON</i>
1568	Caergybi Caergyby Holy Heade Llan y Gwydhel	Saynt Wenefredes Treffynnon	<i>Cronica Walliæ</i>
c. 1570	kaer gybi	trer ffynon	<i>MS Peniarth 147</i>
1699		Holliwell	<i>Parochialia 3</i>
1699		Holywell Tre Phynon	<i>Parochialia Edward Lhuyd vol. 1</i>
1767	Holyhead	Holywell	<i>Returns of Papists 1767</i>

Fig. 8 The transitions of place-names⁴⁶

⁴⁵ “Cotton MS Nero A X/2.” *Digitised Manuscripts*, British Library, http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=cotton_ms_nero_a_x!2_f104r. 赤線は筆者による。また、文字の判読がしやすいよう彩度を調整した。

⁴⁶ “Head Name: Holyhead / Caergybi.” *List of Historic Place Names*, Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headnam>

5.3. 泉

SGGK にはガウェイン卿がウェールズ北岸を東進する場面以外にも流水が登場する場面がある。それは、ガウェイン卿が最終目的地「緑の礼拝堂」に到着した際、礼拝堂の脇を川が泡を立てながら流れる場面である。

Saue, a lyttel on a launde, a lawe as hit were;
A bal3 ber3 bi a bonke þe brymme bysyde,
Bi a for3 of a **flode þat ferked þare**;
þe borne **blubred** þerinne as hit boyled hade. (ll. 2171-2174)

(except at mid-distance what might be a mound,
a sort of bald knoll on the bank of a brook
where fell **water** surged **with frenzied force**,
bursting with **bubbles** as if it had boiled.)

水は泡を立てて勢いよく湧出し、一筋の流れとなって流れている。そしてその水流は、緑の騎士がガウェイン卿のところにやって来る際にも象徴的に登場している。

When he wan to þe **watter**, þer he wade nolde,
He hypped ouer on hys ax, and orpedly strydez, (ll. 2231-2232)

(At the edge of the **water** he will not wade
but vaults the **stream** with the shaft, and strides)

ロバートの聖ウィニフレッド伝においても、このような湧水のイメージが、彼

e/35b7e7ac-800d-48d6-b301-aa5ab26e1dbc.及び"Head Name: Holywell / Treffynnon." *List of Historic Place Names*, Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/0cb2219f-5c4a-488a-a668-223f881d89de>.より筆者作成。

女の頭が着地した場所から湧水する場面で同様に見られる (... As soon as the head of the maiden fell to the ground, a most clear **spring burst forth** in that very spot and spread copiously,...⁴⁷)。ライアンはホーリーウェルの泉の描写が明確に *SGGK* で用いられたと主張するが⁴⁸、これは噴出する水源とそこから流れ出づる川のイメージが両者で明確に共通しているからなのである。

5.4. 信仰に殉ずる生き様

聖ウィニフレッドは神に純潔を捧げた身としてカラドックの求婚を拒否するが、これは *SGGK* では「誘惑」(the Temptation) という作品を貫くテーマの一つとして表出する。

ガウェイン卿には二つの誘惑が襲い掛かる。一つは奥方からの誘惑である。彼はこれを騎士道精神に則り断り続けるが、加えて奥方からの贈り物である「護身の腰帯」の誘惑が彼を襲う。それを身に着ければ何者にも斃されることはないという靈験あらたかなる腰帯の誘惑に負け、ガウェイン卿は我が身可愛さにこれを受け取ってしまい、なおかつ城主との約束を破り、これを城主に渡さなかった。このことが後述の斬首に繋がることになるのだが、そもそもガウェイン卿は緑の騎士との約束を遵守すべく、刎首による死をも厭わず旅に出ているのである。誘惑に負けるという人間らしい一面も見せるガウェイン卿だが、本質的には騎士との約束を果たし、奥方からの誘惑を断るという騎士道精神に則る人物として描かれる。すなわち、両者共に自身の信仰を誘惑によって試され、己が信仰の下に殉ずることを選ぶのである。ライアンも指摘する通り⁴⁹、こうし

⁴⁷ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. pp. 35-36.

⁴⁸ Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia." *Parergon*, no. 4, 1986, p. 60.

⁴⁹ Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia." *Parergon*, no. 4, 1986, p. 60.

た点でガウェイン卿は半ば聖人的な人物といえる。

更にメアリ=アン・スタウクは緑の騎士のガウェインを導く教導者としての側面に着目し、緑の騎士／聖バイノと、ガウェイン卿／聖ウィニフレッドがパラレルを成すことを見出している⁵⁰。緑の騎士はクリスマスのキャメロットに大ぶりの斧を携えてやって来る闖入者として登場するが、最終的にはガウェイン卿に試練を与え、彼に正しき騎士の道を諭す説教者としての役割が強調されるのである⁵¹。

5.5. 斬首後の復活

*SGGK*を貫くもう一つのテーマが「首斬りゲーム」(beheading game)と呼ばれる斬首の交換を伴う余興である。そして、先ほどの「誘惑」とこの「首斬りゲーム」の根底に存在する大元のテーマが「報酬の交換」(the Exchange of Winnings)である。そもそも「首斬りゲーム」の「報酬の交換」(ここでは、緑の騎士から一撃を受けること)を行うためにガウェイン卿はキャメロットを旅立つのであり、道中に辿り着いた城でも城主と交換のゲームを行うことになる。奥方から誘惑は城主とのゲームの一部であり、奥方からの誘惑の末に受け取った「護身の腰帯」を「報酬の交換」として城主へ渡さなかったという約束の不履行が第4フィットの首斬りの場面に繋がる。詰まるところ、*SGGK*は二つの「報酬の交換」が終盤の首斬りに集約される構造を持つのである。

この首斬りの交換によって、聖ウィニフレッドの斬首のイメージは、第1フィットのガウェイン卿による緑の騎士の斬首と、第4フィットの緑の騎士に

⁵⁰ Stouck, M.-A. “Of Talking Heads and Other Marvels: Hagiography and Lay Piety in Sir Gawain and the Green Knight”. *Florilegium*, vol. 17, Jan. 2000, p. 64, <https://journals.lib.unb.ca/index.php/flor/article/view/15362>.

⁵¹ 緑の騎士の聖性については Randall, D. B. J. “Was the Green Knight a Fiend?” *Studies in Philology*, Vol. 57, No. 3, Jul. 1960, pp. 479-491.が詳しい。

よるガウェイン卿の斬首という二つの場面に分割して引き継がれることとなった。

5.5.1. 転がる頭

それでは、まずはガウェイン卿による緑の騎士の斬首の場面を見る。ここで聖ウィニフレッド伝承と平行を成すのは、斬首後地面に落ちた頭が転がっていく様子である。

Pat þe scharp of þe schalk schyndered þe bones,
And schrank þurȝ þe schyire grece, and schade hit in twynne,
Pat þe bit of þe broun stel bot on þe grounde.
þe fayre hede fro þe halce hit to þe erþe,
Pat **fele** hit **foyned** wyth **her fete**, þere hit forth **roled**; (ll. 424-428)

(The cleanness of the strike cleaved the spinal cord
and parted the fat and the flesh so far
that the bright steel blade took a bite from the floor.
The handsome head **tumbles** onto the earth
and the **king's men kick** it as it clatters past.)

緑の騎士の首がガウェイン卿に斬られた後、彼の頭はキャメロットの面々に足蹴にされ地面を転がる。一方、ロバートによるウィニフレッド伝では、ウィニフレッドの身体を教会の外に残し、頭が転がって教会の中へ入っていく。

... he cut off her head with his drawn sword. ... and there had severed her head, her body remained outside the church, while the head immediately **tumbled** into the church, ... the head tumbled among **the feet of the people** ...⁵²

⁵² Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. pp. 35-36.

ボクナムのウィニフレッド伝でも同様に描写される。

Hyre heed of at a oo strook he smette
Wiche doon the body fel doûn to grounde
In the same place the strook was tan
But the heed **rollyd** euene doûn rounde
And among **folkys feet** in to the cherche yt ran
Wherof gretly astoynyd was yche man (ll. 211-216)⁵³

(Here the head off at one strike he smote
which did the body fall down to the ground.
In the same place, the strike was taken
but the head **rolled** even down round
and among **people's feet** into the church the head ran
whereof greatly astonished was each man.)

教会の中へ入ったウィニフレッドの頭は礼拝中の人々の足の間をすり抜け、外の惨劇を生々しく人々に伝えるのである。

転がった頭が蹴られるか否かという違いはあるものの、どちらの頭も人々の足元に転がっていく。ウィニフレッド伝承のこのイメージが、緑の騎士の斬首時の描写に影響を与えたことはバロウも指摘するところであり⁵⁴、*SGGK* 冒頭の斬首はウィニフレッドのカラドックによる斬首と相同である。

5.5.2. 首の傷跡

続いて、緑の騎士によるガウェイン卿の斬首の場面である。厳密に言えば、緑の騎士が三度斬首を仕掛け、ガウェイン卿の精神性を試す場面である。この

⁵³ Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012. p. 414. 以下、現代英語訳は私訳である。逐語訳のため韻律が崩れている部分もあるが、中英語との対照が簡便な点を鑑みてこのままとしている。

⁵⁴ Burrow, J. A. *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight*. Routledge and Kegan Paul, 1965, p. 193.

場面での斬首はガウェイン卿が城主と行った3日間のゲームおよび奥方からの3日間の誘惑と対応しており、3日目に「護身の腰帯」を城主に渡さなかったガウェイン卿の不義が卿の身に返ってくることとなる。

Ða3 he homered heterly, hurt hym no more
Bot snyrt hym on þat **on syde**, þat seuered þe hyde.
Ðe scharp schrank to þe flesche þur3 þe schyre grece, (ll. 2311-2313)

(a ferocious blow, but far from being fatal
it skewed to **one side**, just skimming the skin
and finely snicking the fat of the flesh)

三度目の打ち下ろしで、ガウェイン卿の首の片側に切り傷ができる。これはガウェイン卿が想定していた斬首とは比べ物にならぬほどに軽い傷であり、九死に一生を得たガウェイン卿は歓喜に打ちひしがれる。しかし、事ここに至って緑の騎士の正体が森の中の城の城主であったこと、そして我が命惜しさに「護身の腰帯」を持ち続けたガウェイン卿の怯懦を咎めるための三撃目であったことが明らかにされる。キャメロットに帰還したガウェイン卿は、円卓の面々に自らの傷を不誠実の証として見せる。

Ðe **nirt** in þe nek he naked hem schewed
Ðat he la3t for his **vnleuté** at þe leudes hondes
for **blame**. (ll. 2498-2500)

(And he showed them the **scar** at the side of his neck,
confirming his **breach of faith**, like a badge
of **blame**)

このように、ガウェイン卿の口からは首の傷跡が罪の証として語られるが、こ

の傷はもう一つの役目を担っている。それは、緑の騎士による罪の赦しの証である。

Pou art confessed so clene, beknowen of þy mysses,
And hatz þe penaunce apert of þe poynt of myn egge,
I halde þe polysed of þat plyzt, and pured as clene
As þou hadez **neuer forfeled** syþen þou watz fyrst borne; (ll. 2391-2394)

(By confessing your failings you are free from fault
and have openly paid penance at the point of my axe.
I declare you purged, as polished and as pure
as the day you were born, **without blemish or blame.**)

斧の一撃は罪に対する罰であり、同時に赦しでもある。ガウェイン卿の首の傷はこれらの象徴として機能する。

翻って聖ウィニフレッドの伝承を見てみると、聖バイノによって復活を果たした聖ウィニフレッドの首にも傷跡が残っている。

... a certain very slender whiteness, like a thread, **surrounded her neck** and covered the place of the cutting. Thereafter, this always remained ... to indicate ... **the proof of miracle.**⁵⁵

こちらは首の周りを一周する形の細い糸のような傷跡である。聖ウィニフレッドの図像には彼女の象徴として欠かさず描かれるものだが、これは奇跡すなわち神の救済を示す証左として機能する。

すなわち、ガウェイン卿の傷跡も聖ウィニフレッドの傷跡も共に救済の証として機能するものであり、バロウも指摘する通り⁵⁶、*SGGK* 終盤の斬首は復活後

⁵⁵ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. p. 38.

⁵⁶ Burrow, J. A. *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight*. Routledge and Kegan Paul, 1965, p. 193.

の聖ウィニフレッドと相同を成すといえる。

5.6. 帯と外套

最後に着目するのが「生命への加護を与える布」のモチーフである。これは聖ウィニフレッド伝では「聖バイノの外套」に、*SGGK* では「護身の腰帯」にそれぞれ表象される。

聖バイノがウィニフレッドを復活させる時、彼はウィニフレッドの頭を身体に挿げると、彼の外套を彼女の身体に被せる。

... Afterwards he arranged the head and brought into the rest of the body and, spreading **his cloak** over it, he breathed into the nostrils....⁵⁷

また、ボクナムの版ではウィニフレッドが再び立ち上がる際にも、ウィニフレッドが聖バイノの外套に覆われていることが明示されている。

Wich doon efthsonys he gan yt kysse
And in hyre nosethyrlys he blew softly
And w^t **his mantel** curyd yt dede blysse
[...]
And whan thus his preyere endyd had Beunoon
And al the peple had answerd deuouhtly
Amen from **undyr his mantel** anoon
Wenefrede roos up euene sodeynly (ll. 303-305, 359-362)⁵⁸

(Which did often he began it kiss,
And in her nostrils he blew softly

⁵⁷ Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000. p. 37.

⁵⁸ Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012. pp. 414-416.

And with **his mantle** cured it[with] blissful deed
[...]
And when thus his prayer ended had Beuno
And all the people had answered devoutly
Amen from **under his mantle** immediately
Winifred rose up even soddenly)

このように、聖バイノの外套はウィニフレッドの復活において象徴的に癒しの働きを担っているといえる。

SGGK内でこれと同じ役割を持つのが、ガウェイン卿が奥方から贈られた「護身の腰帯」である。其は「緑色をした絹製の」(grene sylke /green silk, l. 1832)帯であり、それを締めている限り、天下の誰からも切り倒されることは無いという謂れを持つ。

For quat gome so is gorde with þis **grene lace**,
While he hit hade hemely halched aboute,
þer is no hapel vnder heuen tohewe hym þat myȝt,
For he myȝt not be slayn for slyȝt vpon erþe.' (ll. 1851-1855)

(For the body which is bound within this **green belt**,
as long as it is buckled robustly about him,
will be safe against those who seek to strike him,
and all the slyness on earth wouldn't see him slain.”)

ガウェイン卿に下された斬首ではわずかな傷を付けるに留まったため、腰帯の靈験が効力を発揮することは無かったように思える。しかし、物語最終盤にて件の腰帯が緑の騎士のものであることが判明する(hit is my wede þat þou werez, þat ilke wouen girdel, / the belt you are bound with belongs to me;, l. 2358) ことで、ここに新たな視座が開かれる。序盤にキャメロットを来訪する緑の騎士の装飾具の一つには、同じく絹でできた緑の帯があった。

Heme wel-haled hose of þat same,
þat spenet on his sparlyr, and clene spures vnder
Of bryzt golde, vpon **silk bordes** barred ful ryche,
[...]
And alle his vesture uerayly watz clene **verdure**, (ll. 157-159, 161)

(On his lower limbs his leggings were also green,
wrapped closely round his calves, and his sparkling spurs
were green-gold, strapped with **stripy silk**,
[...]
In all vestments he revealed himself veritably **verdant!**)

これは拍車を足に結わえ付けるためのもので、厳密には腰帯ではないが、ガウェイン卿による斬首で絶命に至らなかった緑の騎士の不死性が、彼の装飾具に由来するものであると考える（に聴衆が思い至る）のはそう難しいことではなからう。序盤の驚異の伏線がこの段に至って回収される物語構造は見事という他あるまい。結果として、*SGGK*では、腰帯が与える護身の加護が聖ウィニフレッド伝よりもより直截的に示されることとなっている。そして、「この生命への加護を与える布」というモチーフに二つの物語の共通点を見出すことが可能となるのである。

6. 結論

ガウェイン詩人に関して判明している情報は少なく、彼が実際に北ウェールズ、ひいてはホーリーウェルを実際に訪れていたかは定かではない。しかし、彼が生きたとされるノース・ウェスト・ミッドランズには聖ウィニフレッドの遺骸が移され、彼女の伝承を広めるハブとなったシュルーズベリーが位置している。ガウェイン詩人の他の作品が宗教的著作であり、別の聖人伝も書き記していることも踏まえれば、彼が聖ウィニフレッドの伝承に触れていたことはほぼ間違いない。

このことは、*SGGK* と聖ウィニフレッド伝との間に様々なパラレルが見られることから補強される。緑の騎士の斬首時の描写とガウェイン卿の首の傷跡が聖ウィニフレッドの斬首と復活にそれぞれ対応している。ガウェイン卿、聖ウィニフレッド両者共に生命への加護を与える布と縁深く、更には共に信仰に対する試練として異性に誘惑され、これを克服する。水が湧出し、川となって流れ行くイメージも共通して見られる。

もちろん、斬首後の復活、流れ出づる水のイメージは聖ウィニフレッドに特有のものではない。しかし、これにガウェイン卿の旅路から導出される北ウェールズという地域を併せて考えれば、“*pe Holy Hede*”と聖ウィニフレッドの間には、類似の伝承を持つ他の聖人と比べものにならない程の強固な繋がりが見えてくる。

一般的に騎士道物語として解釈される *SGGK* であるが、その背景並びに基層に存在する地方の聖人の伝承を除外して考察することは叶わない。*Cotton MS Nero A.x* という写本単位で考えれば、含まれるその他の作品が宗教的に読まれ解釈されることから、*SGGK* を騎士ガウェインという半ば聖人的側面を持つ

人物の聖人伝として読むことは矛盾を引き起こさない。作品を貫くテーマや種々のモチーフを複層的に絡み合わせ、ガウェイン詩人の^{イマジネール}想像界を再構築することで、謎の地名として現れる“Holy Head”が聖ウィニフレッドの聖地ホーリーウェルの、そして彼女の「聖なる頭」の表象であることが傍証されるのである。

参考資料一覧

- Armitage, Simon. *Sir Gawain and the Green Knight*. W. W. Norton & Company, 2007.
- Bradshaw, Henry. *The Life of Saint Werburge of Chester: Englisht A.D. 1513, Printed by Pyson A.D. 1521, and now Re-edited by Carl Horstmann*. Early English Text Society, 1887.
- Brewer, Derek. “Introduction.” *A Companion to The Gawain-Poet*. ed. by Derek Brewer and Jonathan Gibson, published by D. S. Brewer, 1997, pp. 1-21.
- Burrow, J. A. *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight*. Routledge and Kegan Paul, 1965.
- Chambers, R. W. “Sir Gawayne and the Green Knight, II. 697-702.” *The Modern Language Review*, vol. 2, no. 2, 1907, p. 167.
- “Cotton MS Claudius A V.” *Digitised Manuscripts*, British Library, http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Cotton_MS_Claudius_A_V.
- “Cotton MS Nero A X/2.” *Digitised Manuscripts*, British Library, http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=cotton_ms_nero_a_x12_f104r.
- “Detailed record for Lansdowne 436.” *Catalogue of Illuminated Manuscripts*, British Library, <https://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=5273&CollID=15&NStart=436>.
- “Digital Map.” *LINGUITIC GEOGRAPHIES: The Gough Map of Great Britain*, King’s College London, <http://www.goughmap.org/map/>.
- Dodgson, J. McN. “Sir Gawain's arrival in Wirral.” *Early English and Norse Studies presented to Huge Smith in honour of his sixtieth birthday*. ed. Arthur Brown and Peter Foote, Methuen, 1963, pp. 19-25.
- Elliot, R. W. V. *The Gawain Country*. University of Leeds, 1984.
- “Landscape and Geography.” *A Companion to The Gawain-Poet*. ed. by Derek

Brewer and Jonathan Gibson, published by D. S. Brewer, 1997, pp. 105-117.

Golding, Brian. “Piety, Politics, and Plunder Across the Anglo-Welsh Frontier: Acquiring the Relics of Winifred and Beuno.” *Monasteries on the Borders of Medieval Europe: Conflict and Cultural Interaction*, ed. by Emilia Jamroziak and Karen Stöber, Brepols Publishers, 2014, pp. 19-48.

Gollancz, Israel. *Sir Gawain and the Green Knight: Re-edited from MS. Cotton Nero, A. x., in the British Museum, by Sir Israel Gollancz, Litt. D., F.B.A. With Introduction Essays by Mabel Day, D.Lit. and Mary S. Serjeantson, M.A., D.Phil.* Oxford University Press, 1940.

Gregory, James Ryan. "A Welsh Saint in England: Translation, Orality, and National Identity in the Cult of St Gwenfrewy, 1138-1512." PhD diss., University of Georgia, 2012.

—— "The Life of St. Winifred: The Vita S. Wenefrede from BL Lansdowne MS 436." *Medieval Feminist Forum: Subsidia Series*, Vol. 4, the University of Iowa Libraries, 2016.

Hallmark, Sally. "Gwenfrewy the guiding star of Gwytherin: From maiden and martyr to abbess and saint - The cult of Gwenfrewy at Gwythein." PhD diss., University of Wales Trinity Saint David, 2015.

"Head Name: Holyhead / Caergybi." List of Historic Place Names, Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/35b7e7ac-800d-48d6-b301-aa5ab26e1dbc>.

"Head Name: Holywell / Treffynnon." List of Historic Place Names, Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, <https://historicplacenames.rcahmw.gov.uk/placenames/headname/0cb2219f-5c4a-488a-a668-223f881d89de>.

Henken, Elissa R. *Traditions of the Welsh Saints*, published by D. S. Brewer, 1987.

Horobin, Simon. “The Angle of Oblivioun: A Lost Medieval Manuscript Discovered in

Walter Scott’s Collection.” *Times Literary Supplement*, 11 Nov 2005: 12-13.

Hurlock, Kathryn. *Medieval Pilgrimage, c. 1100-1500*. Palgrave Macmillan, 2018.

池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』、名古屋大学出版会、2020年。

Jones, Francis. *The Holy Wells of Wales*. University of Wales Press, 1992.

Kittredge, George Lyman. *A Study of Gawain and the Green Knight*. Harvard University Press, 1916.

“Legenda Aurea.”, *The Advocates Library*, The Faculty of Advocates, <http://www.advocates.org.uk/faculty-of-advocates/the-advocates-library/significant-finds-at-abbotsford/legenda-aurea>.

Madden, Frederic. *Syr Gawayne; a collection of ancient romance-poems, by Scottish and English authors, relating to that celebrated Knight of the Round Table; with an introduction, notes, and a glossary by Sir F. Madden*. Bannatyne Club, 1839.

“MS. Laud Misc. 114.” *Medieval Manuscripts in Oxford Libraries*, Bodleian Libraries, https://medieval.bodleian.ox.ac.uk/catalog/manuscript_6923.

Pepin, Ronald and Feiss, Hugh, OSB. *Two Medieval Lives of Saint Winefride*. Peregrina Publishing Co, 2000.

Pryce, Huw. “Pastoral Care in Early Medieval Wales.” *Pastoral Care Before the Parish*, ed. by John Blair and Richard Sharpe, Leicester University Press, 1922, pp. 41-62.

Putter, Ad. and Stokes, Myra. *The Works of the Gawain Poet: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. Penguin Classics, 2014.

Randall, D. B. J. “Was the Green Knight a Fiend?” *Studies in Philology*, Vol. 57, No. 3, Jul. 1960, pp. 479-491.

Ryan, J. S. "Sir Gawain and St Winifred: hagiography and miracle in West Mercia."

Parergon, no. 4, 1986, pp. 49-64.

Scully, Robert E., S. J. "St. Winefride's Well: The Significance and Survival of a Welsh Catholic Shrine from the Early Middle English Ages to the Present Day." *Saints and Their Cults in the Atlantic World*, ed. Margaret Cormack, the University of South Carolina Press, 2007, pp. 202-228.

瀬谷幸男訳、伝ネンニウス『中世ラテン年代記 ブリトン人の歴史』、論創社、2019年。

Stouck, M.-A. "Of Talking Heads and Other Marvels: Hagiography and Lay Piety in Sir Gawain and the Green Knight". *Florilegium*, vol. 17, Jan. 2000, pp. 59-72, <https://journals.lib.unb.ca/index.php/flor/article/view/15362>.

Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, Eds. *Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd ed. Rev. by Norman Davis. Oxford Clarendon P, 1967.

山本信太郎「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼——中世から近世の聖ウィニフリッドの泉——」、『神奈川大学人文学研究叢書 43「自然・人間・神々」——時代と地域の交差する場』、上原雅文編、お茶の水書房、2019年、pp. 149-184.

- 本文 35 字×25 行×40 ページ、全 29026 文字